

平成 23 年 4 月 30 日

岩手県大船渡市写真修復支援及び古文書文化財調査

調査責任者 江前敏晴（えのまえとしはる）

東京大学大学院農学生命科学研究科生物材料科学専攻製紙科学研究室.

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

Tel 03-5841-8199 Fax 03-5841-5271

日程： 2011 年 4 月 22 日(金)～24 日(日)

依頼者： 金野^{きんの}聡子（紙本保存修復士）

参加者： 白岩^{しらいわ}洋子（紙本・写真修復）、東嶋健太、佐藤円香、江前^{えのまえ}敏晴（以上、東大関係者）、岩間美代子、宮川洋一郎、宮川皓子（以上、ネイチャーセンターリセン）

目的： 大船渡市からの依頼で膨大な量の被災写真の修復を行う金野聡子さんの支援と綾里の千田家古文書被災状況調査

4 月 23 日(土)

大船渡市役所で金野聡子さんと午前 10 時に合流した。金野さんと旧来の知人である白岩洋子さんは無事の再会を果たし、抱き合っていた。市役所の防災センターを訪ね、副センター長（総務部総務課長）に調査届を提出し、金野聡子さんが行っている写真修復に必要な資材を提供することと、写真修復に詳しい白岩洋子さんを軸に修復マニュアルを作成すること、古文書等の文化財調査を行うことが今回の活動の目的であり、併せて支援物資を提供することを説明した。市からは被害状況と復興状況の説明を受けた。市内のスーパーに 1960 年のチリ地震津波の高さ約 5m の位置に印をしていたが今回はその 2 倍以上の高さの津波であったことが印象的であった。文化財を担当の教育委員会事務局（生涯学習課長）とも懇談し、金野聡子さんを中心に地元の関係者で写真修復支援活動の支援要請組織を作る計画であることを説明した。

多数の犠牲者が出た特別養護老人ホーム「さんりくの園」で献花したあと、金野聡子さんのかつての勤務地である大船渡市立三陸公民館を訪ねた。自衛隊の救援隊員が撤去作業を行いながら、行政文書、図書、写真類を回収していた。壁に高く掲げられた「豊海躍動」と題する三陸地区のシンボリックな絵画も破損していたが、是非修復してどこかに飾っていただきたいものである。

総合福祉センターで写真の修復作業に入った。白岩さんの話では、1970 年以降の RC ベース印画紙の写真は汚れを落とすために水洗しても問題ないので、重油をかぶった最近の写真は、表面の重油を取り除くだけで修復が済むことも十分あるようである。古い白黒写真は表面の画像層が剥離しやすいので専門家に任せた方がよさそうである。印画紙の材質（古さ）、破損の程度、付着物（重油、汚水、泥の乾燥物など）の種類によって写真を選別し、単純作業で済むものは、ボランティアの方にどんどんお願いすればよいのではなかろうか。

副センター長（大船渡市社会福祉協議会業務課長）から津波被災時の様子をお聞かせ頂いた。センターの正面は被災しなかったように見えるが、海に近い裏手は民家と民家の間の裏庭程度の隙間にも車 4 台が流されてきていた。街の裏通りにある瓦礫撤去が完了するまでには数年かかるかもしれない。副センター長ご自身もご自宅が流されてしまい、地震当日の夜は瓦礫を踏み越えて自宅まで行ったものの、跡形もなくなっており戻ってきたい。またお父様の自宅は、三陸鉄道の線路の山側にあり、明治と昭和の三陸津波が到達しなかった場所であったが、家ごと流されて現在も行方不明とのことであった。（江前）

総務課、教育委員会にご理解を頂き、岩間、宮川、宮川（皓）は「大船渡市立大船渡中学校」避難所に、物資（小中学校の児童生徒用の学習ノート・大人用紙おむつ・色鉛筆・折り紙・洗濯石けんなど）を届けた。特に学習帳が不足しているというお話であった。体育館では被災者のプライバシー確保が難しく、衛生面でも課題は多いと感じた。係の方は、休日に訪問する慰問者やボランティア団体の対応で、相当お疲れの様子であった。（岩間）

4 月 24 日(日)

江前、東嶋、佐藤は千田家の当主である千田^{ちだ}基^き久^く兵衛^{へい}さんを訪ねた。お御堂の入り口の踏み段の上から 2 番目の縦の板が津波で流され、支柱を支える石が外れて手前に落ちる被害が見受けられた。内部の阿弥陀如来像は元禄 15 年（1702 年）に当時の当主が東本願寺から持ち帰ったと言ひ、書状を見せていただいた。一如上人（1649～1700 年）の書と言われる「南無阿弥陀仏」と書かれた掛け軸もあった。像の右側の掛け軸は掛け紐が切れて落下したため、気仙沼の経師屋に修理に出したところ今回の地震が発生し、津波によって経師自身が建物や掛け軸と一緒に流されてしまったようだ、とのことであった。お御堂の右隣にある土蔵には、海産物の売買や海運業に関わる古文書がある。1 階には未整理の古文書が入った段ボール箱があったが、そのうちの 2 箱は床から数 cm の部分だけが浸水していた。中には本当に古文書類があるのかどうかは確認しなかった。2 階にある撮影済みの古文書類は津波の被害が全くなかった。

居住空間でもある母屋の奥には色彩鮮やかな屏風と墨書を貼り付けた襖は床上 40～50cm

の浸水による水染みができていた。壁の部分にある水染みよりも墨書料紙の水染みのラインの方が高く、襖の素地部分は、はっ水性が低いせいかさらに高い位置に水染みのラインがあった。毛管現象による吸収があるため、紙への浸水は実際の浸水高さを示す壁の部分よりも高くなることがわかる。千田さんは屏風が塩水につかったままではいけないと思われたようで、水を掛けたとのことであった。幅 1cm、長さ 3cm ほどの剥がれがあった。屏風の絵の中には、親が蚊に刺されないように、親の枕元で子供が裸になってうずくまっているという親孝行の図があった。子供の肌には蚊が描かれていたのだが、肝心の蚊を描いた絵具部分が津波で流されてしまったとのことだった。親孝行の意図が理解しにくい図になってしまったようである。

綾里は、1896 年の明治三陸地震津波で高さが最高の 38.2m を記録した場所である。千田家の敷地は海に面しているが海面からは 12m ほどの高さにあり、元禄 15 年以降津波が届いた記録はないらしい。ご当主自身も津波発生当日は膝まで海水につかりながら上に逃げたとのことであった。(江前)

岩間、宮川、宮川（皓）は、総合福祉センターで写真修復作業に取り組んだ。金野さんや白岩さんと相談し、写真と動画による撮影と、ボランティアを想定した作業を分担して行った。既に乾燥した写真の保管作業も行った。津波から 1 カ月を過ぎ、新たに持ち込まれる写真の変色や汚れは日増しに酷くなっていたようだ。水洗、乾燥、袋詰めなどの作業は、ボランティアでも十分可能であった。台紙やビニールカバーを切る、水につけて台紙から写真を剥がすなどの作業にも幾つかの異なる工程があり、分類されていればやりやすい。(岩間)

江前らが総合福祉センターに到着し、写真修復作業の概要と千田家の文化財の様子を簡単に報告し合ってから、センターを出た。大船渡市内は桜が満開でのどかにすら感じられ、修復された写真とともに被災者を和ませてくれることを祈るばかりである。

東京に戻ってから、宮城史料ネットの平川新氏（東北大学）に電話で千田家文書の被害状況を説明した。1 階の段ボールの中にあると思われる未整理の文書が被災している可能性があり、それらを修復するため、修復を無償で行ってもらえる機関を募ることにした。専門的な扱い方の知識が必要な梱包や運搬作業も含まれるが、運搬までは手が回らない可能性が高いので、運搬と修復の作業を分けてボランティアを募ることにした。

金野さんは市からの依頼により献身的に写真修復を続けているが、彼女自身がボランティアである。修復された写真の持ち主を見つける作業も残っており、被災者の生活確保がまだ不十分で写真修復作業に入っていない陸前高田市でもそのうち同様の状況となろう。被災者の生きる糧にもなる個人文化財修復に協力してくれるボランティアがまだ大勢必要である。(江前)